

自伝的記憶の概括化と能動的注意制御機能との 関連性の検討

平山 千洋 管 思清¹ 早稲田大学 松本 昇 信州大学
田口 潤一郎 熊野 宏昭 早稲田大学

Examination of the relationship between overgeneral autobiographical memory and voluntary attention control

Chihiro HIRAYAMA, Siqing GUAN¹ (Waseda University),
Noboru MATSUMOTO (Shinshu University), Junichiro TAGUCHI,
and Hiroaki KUMANO (Waseda University)

Overgeneral autobiographical memory (OGM) is considered a risk factor for depression. Previous studies have established the relationship between passive attention control and OGM. However, there are only a few studies examining the relationship between OGM and voluntary attention control. Thus, the current study aims to examine the relationship between OGM and the scores obtained from the voluntary attention control scale. We administered an online survey using a questionnaire and the autobiographical memory test (AMT) on 109 students from Waseda University. Results suggested that neutral OGM is negatively correlated with depression and positively correlated with voluntary attention control. Therefore, the study inferred that neutral OGM may have an adaptive function. However, the association between depression and OGM was not reproduced, which suggests the limitation of the online version of the AMT-OI.

Key words: overgeneral autobiographical memory, voluntary attention control, depression

Waseda Journal of Clinical Psychology
2021, Vol. 21, No. 1, pp. 3 - 8

自伝的記憶の概括化（OverGeneral autobiographical Memory : OGM）とは、具体的な自伝的記憶を想起することを求められた際に、具体的な出来事に関する記憶ではなく、概括的な記憶を報告してしまう現象のことである（松本・望月，2012）。特定の時間、場所で起こった1日未満の記憶を具体的な記憶とするのに対し、概括的な記憶とは、“いつも自転車で登校していた”などの繰り返される出来事や類似した出来事に関する記憶であるカテゴリー化記憶，“去年の春休みにオーストラリア旅行をした”などの1日以上長期間に渡る出来事に関する記憶である拡張記憶、出来事ではなく、人や事物に関する意味的情報である意味連想の3つに分けることができる（Raes, Hermans, Williams, & Eelen, 2007）。OGMはうつ病の危険因子とされており、うつ病や再発に対する脆弱性を高める可能性があることが示唆されている（Brittlebank, Scott, Williams, & Ferrier, 1993）。その他にも、OGMの想起傾向がある人々には

問題解決における困難（Goddard, Dritschel, & Burton, 1996）や将来起こる出来事に対する想像力の欠如、ネガティブな認知（Williams, Ellis, Tyers, Healy, Rose, & MacLeod, 1996）など様々な問題が生じることがこれまでの研究で明らかにされている。

Williams（2006）はOGMの発生要因を説明しようとするCaRFAXモデルを開発した。Williams（2006）によると、捕らわれと反すう（Capture & Rumination）、機能的回避（Functional Avoidance）、実行容量と制御（Executive capacity and control）という3つの異なるメカニズムが存在し、それらは単独で、あるいは相互に組み合わせられてOGMに寄与しているといわれている。すなわち、検索時に反すうや自己関連思考への捕らわれが生じること、実行制御の不足によって検索目標と異なる表象の活性化を適切に制御できないこと、具体的な記憶を検索するという目標を保持できないことで、出来事の細部まで検索が行き届きにくくなり、概括的な記憶の報告が増加すると考えられている（松本・望月，2013）。

抑うつや反すうと大きく関わりがある概念として、

¹ 日本学術振興会特別研究員（Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science）

注意制御機能が存在する。注意制御機能の分類には「制御モード」と「方向性のコンポーネント」の2種類があるとされている。「制御モード」は随意的であるという特徴を持つ能動的制御と非随意的であるという受動的制御というモードに分類され(今井, 2014), 「方向性のコンポーネント」とは「選択的注意」, 「注意の転換」, 「注意の分割」という3つで構成されている。「選択的注意」とは, 多くの刺激や対象から特定の刺激や対象に対して注意を向ける機能, 「注意の転換」とは, 特定の刺激や対象に向けていた注意を必要に応じて中断し, 他の刺激や対象に適切に切り替える機能, また, 「注意の分割」とは, 複数の対象に同時に注意を配分させる機能である(西・今井・金山・熊野, 2013)。注意制御機能の低下は抑うつ発症, 維持要因として考えられている上, 注意制御機能の低下によって反すうが活性化されることも示されている(Hsu, Beard, Rifkin, Dillon, Pizzagalli, & Björkqvinnsson, 2015)。Takano, Moriya, & Reas (2017)の研究では, 意味的に手がかり語と関連しない情報への注意を抑制する, または無視することの困難さがOGMと関連することが示されており, 選択的注意の問題がOGMを引き起こすことを示唆している。さらに, 能動的な注意制御機能を向上させることを目的とした注意訓練(Attention Training: ATT; Wells, 1990)の実施によって抑うつや不安の低下が示されてきた(田中・杉浦・神村, 2010)。OGM研究において, マインドフルネス訓練によって, OGMの改善に成功した介入研究(Heeren, Van Broeck, & Philippot, 2009)も存在する。マインドフルネス瞑想の手続きは, 注意のコントロールが求められる点で, ATTの手続きと類似したものである(田中他, 2010)と言えることから, ATTによる能動的注意制御機能の変動がOGMの改善に関連する可能性が考えられる。

OGM研究では, Autobiographical Memory Test (AMT; Williams & Broadbent, 1986)を用いて測定される。AMTは, 提示した手がかり語から想起される自伝的記憶を報告する課題であり, 研究ごとに用いられる手がかり語の内容や報告するまでの制限時間, 教示法などが異なる。非臨床群を対象とした研究では, OGMと抑うつ症状に有意な相関が見られないことが多い(Raes et al., 2007)。しかし, 非臨床群においてOGMを検討するために開発されたAMT - minimal instructions (AMT-MI; Debeer, Hermans, & Raes, 2009)やAMT - optional instructions (AMT-OI; 松本・望月, 2013)では, 具体的な記憶の想起を抑え, 抑うつ症状との関連を再現した。また, AMTは対面で行われるのが一般的であるが, Takano, Mori, Nishiguchi, Moriya, & Reas (2017)では, オンライン調査でAMTを実施し, 抑うつ症状との関連を示している。

AMTから得られたエピソードを, 具体性で分類することによってOGM研究は行われるが, 近年では, う

つ病患者において, ネガティブな考えなどの内在的な手がかりに直面すると, ポジティブ, あるいはニュートラルな出来事を思い出すことが困難な可能性があると考えられており(Hitchcock, Golden, Werner-Seidler, Kuyken, & Dalgleish, 2018), エピソードの感情価別にOGMを検討する必要性が示唆されている。

本研究では, 能動的注意制御機能とOGMの関連を検討する最初のステップとして, 前者を自記式質問紙によって, 後者をAMTによって測定する。受動的な注意制御機能とOGMとの関連をみた研究は存在するが, 能動的な注意制御機能との関連性を検討したものはない。注意制御における能動的側面を測定することは臨床的にも重要な情報となりうる上(今井・熊野・今井・根建, 2015), 関連が見られれば, ATTによってOGMを改善することが可能だという一助になる。したがって, 能動的注意制御機能とOGMに負の関連がみられることを仮説として検討を行った。同時に, 具体性からの検討に加え, エピソードを感情価に分けて各尺度との関連性を検討することも目的の一つとした。抑うつ者においてOGMとの関連性を示した反芻(Raes, Hermans, Williams, Beyers, Brunfaut, & Eelen, 2006)や, 思考や感情, 反応間の葛藤のモニタリングと解決などを可能にするとされる実行注意(Rueda, Posner, & Rothbart, 2004)を踏まえたEC(山形・高橋・繁樹・大野・木島, 2005)の「注意の制御」からもOGMを検討する。

方 法

対象者及び倫理的配慮

早稲田大学に通う学生109名を対象に調査を行った。特定の回答を選択するように指示した項目で誤った回答を選択した4名, 自由記述課題において教示にそぐわない回答をした3名, 外れ値が検出された1名を除外し, 有効回答101名(男性34名, 女性67名, 平均年齢21.37歳, $SD=1.43$)を分析対象とした。外れ値の基準は, 四分位範囲をIQRと表すとき, 第三四分位数 $+1.5 \times IQR$ より大きい値, 第一四分位数 $-1.5 \times IQR$ より小さい値が複数の尺度で見られるものとした。

なお, 本研究は, 早稲田大学における「人を対象とする研究に関する倫理委員会」において, 審査不要の判断がなされた上で実施した(承認番号:2020-HN018)。

手続き

本調査は2020年10月から同年12月にかけて実施した。早稲田大学のサークル, また, 早稲田大学の各研究室で, それぞれの責任者に許可を得た上で, オンラインアンケートツールQualtricsを用いたオンライン調査の参加者を募集した。

調査材料

- (a) フェイスシート：回答者の性別、年齢を尋ねた。
- (b) The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale 日本語版 (CES-D；島・鹿野・北村・浅井，1985)：抑うつ傾向を測定するための 20 項目 4 件法の尺度であり、高い信頼性と妥当性を有している。得点が高いほど、抑うつ障害の症状傾向が高いことを示す。本研究において CES-D は十分な内的一貫性を示した ($\alpha = .88$)。
- (c) Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版 (RRQ；高野・丹野，2008)：「反芻」と「省察」の 2 因子から構成される尺度であり、高い信頼性と妥当性を有している。それぞれの下位尺度は 12 項目 5 件法で回答を求めるものとなっており、本研究では、「反芻」に該当する 12 項目を用いた。得点が高いほど反芻を強く保持していることを示す。本研究において RRQ の「反芻」は十分な内的一貫性を示した ($\alpha = .91$)。
- (d) 能動的注意制御尺度 (Voluntary Attention Control Scale；今井他，2015)：注意制御機能に関する項目の「選択的注意」、「注意の転換」、「注意の分割」の 3 つの下位尺度から構成される 18 項目 6 件法の尺度であり、高い信頼性と妥当性を有している。本研究において VACS は十分な内的一貫性を示した ($\alpha = .92$)。下位尺度の「選択的注意」、「注意の転換」、「注意の分割」においても十分な内的一貫性を示した (それぞれ $\alpha = .87$, $\alpha = .89$, $\alpha = .95$)。
- (e) 成人用エフォートフル・コントロール尺度日本語版 (EC；山形他，2005)：「行動抑制の制御」、「行動始発の制御」、「注意の制御」の 3 つの下位尺度から構成される 35 項目 4 件法の尺度であり、高い信頼性と妥当性を有する。本研究では「注意の制御」に該当する 12 項目を用いた。得点が高いほど必要に応じて集中したり注意を切り替えたりする実行注意が高いことを示す。本研究において EC の「注意の制御」は十分な内的一貫性を示した ($\alpha = .78$)。
- (f) 自由記述課題

Autobiographical Memory Test - optional instructions (AMT-OI；松本・望月，2013)：非臨床群における OGM を検出するために開発されたもので、本研究では“「いつ」「どこで」「何が」など具体的な記憶を思い出すのが望ましいが、思い出せない場合にはそうでなくても構わない”という教示をしている。

本研究では回答者に 15 個の手がかり語を提示し、手がかり語から想起された具体的な出来事を記述してもらうように指示した。手がかり語は de Decker, Hermans, Raes, & Eelen (2003) から、ポジティブ語 5 種類 (幸せな、安全な、面白い、成功した、驚いた)、ネガティブ語 5 種類 (悲しい、怒った、下手な、傷ついた、孤独な)、関口・竹中 (2005) から、ニュートラル語 5 種類 (走る、訪れる、本、車、流行) を使用し、ポジティブ語、ネガティブ語、ニュートラル語を順番に提示し

た。本研究では、手がかり語の提示と記述する制限時間を 90 秒設け、90 秒を過ぎると自動的に次の手がかり語へと遷移するようなオンラインのアンケートを作成した。

課題の教示を統制するため、課題の教示動画を作成し、課題実施前に視聴を求めた。課題実施の注意事項として、それぞれの単語に対して 1 つずつ異なる記憶を想起してもらうこと、それぞれの単語に対して 10 字以上記入してもらうこと、思い浮かべた出来事の記述が終わり次第、次の単語へと進んで構わないことを示した。また、課題の練習として、穏やかな、つまらない、公園の 3 つの例題を設けた。

分析方法

具体的記憶の比率を“具体的記憶の数 / (15 - 省略 & エラー)”，概括的記憶の比率を“カテゴリー化記憶の数 / (15 - 省略 & エラー)”とし、具体的記憶の比率及び概括的記憶の比率と各尺度との関連を検討するために、Pearson の積率相関分析を実施した。

解析は Microsoft Excel ver. 16.44, 解析ソフトウェア SPSS ver. 26 (IBM, New York, USA) を使用した。

仮説

- 1：具体的記憶の比率と VACS 総得点、及び VACS の「選択的注意」、「注意の転換」、「注意の分割」、EC の「注意の制御」は正の相関を示す。
- 2：概括的記憶の比率と VACS 総得点、及び VACS の「選択的注意」、「注意の転換」、「注意の分割」、EC の「注意の制御」は負の相関を示す。
- 3：ポジティブな具体的記憶の比率と CES-D は負の相関を示す。
- 4：ネガティブな概括的記憶の比率と CES-D は正の相関を示す。

結果

AMT-OI によって得られた回答は、Raes et al. (2007) に従い、実験者と実験者以外の評定者によって以下の 5 つに分類された。特定の瞬間や特定の出来事について書かれたものは「具体的な記憶」、特定の瞬間、出来事ではなく繰り返される出来事や類似した出来事について書かれたものは「カテゴリー化記憶」、1 日より長い時間に渡る出来事について書かれたものは「拡張記憶」、実際の出来事ではなく、単語から連想したと思われる事実や情報について書かれたものは「意味連想」、無回答、未来志向のもの、記述された記憶が重複しているもの、記述された記憶が 10 字未満のもの、また制限時間によって記述が途中で終わってしまっているものについては「省略 & エラー」とした。実験者と評定者の分類の一致率は $\kappa = .58$ であった。分類が一致しなかったものに関しては、再度分類の定義を確認し、実

験者と評定者それぞれが分類に至った根拠を述べ合った。なお、分類不一致となった原因が記述内容の文脈や場面の曖昧さにあったことから、想定されうる主語や時制を補う作業を行った上で、評定者間で再分類をした。上記のプロセスは、評定者間での分類が一致するまで繰り返された。また、得られたエピソードの感情価をポジティブ、ネガティブ、ニュートラルの3つに分類した。実験者と評定者の感情価の分類の一致率は $\kappa=.70$ であり、十分に一致した。同様に、分類が一致しなかったものに関しては協議を行った上で分類を決定した。

本研究では、省略&エラーに分類されたものは分析から除外し、具体的記憶の比率と概括的記憶の比率から分析した結果を報告する。

なお、分析には意味連想が8つ以上あった者、省略・エラーが5つ以上あった者のデータを除外した。

記述統計量及び相関分析

具体的記憶の比率及び概括的記憶の比率と各尺度の平均値及び標準偏差、具体的記憶の割合及び概括的記憶の割合と各尺度の相関を Table 1 に示した。

具体的記憶の比率と CES-D ($r=.05, p=.62$), RRQ の「反芻」($r=.11, p=.30$), VACS の総得点 ($r=-.17, p=.12$), 選択的注意 ($r=-.15, p=.16$), 注意の転換 ($r=-.12, p=.24$), 注意の分割 ($r=-.12, p=.27$), EC の「注意の制御」($r=-.17, p=.11$) には有意な相関は見られなかった。

概括的記憶の比率と CES-D の有意な相関は見られなかった ($r=.01, p=.93$)。一方で、概括的記憶の比率は VACS の総得点と有意傾向の弱い正の相関が見られた ($r=.17, p<.10$)。しかし、概括的記憶の比率と RRQ の「反芻」($r=.03, p=.81$), 選択的注意 ($r=.12, p=.27$),

注意の転換 ($r=.16, p=.12$), 注意の分割 ($r=.13, p=.21$), EC の「注意の制御」($r=.17, p<.10$) には有意な相関は見られなかった。

エピソードの感情価別に具体的、概括的記憶の比率を検討すると、ポジティブな具体的記憶の比率と CES-D ($r=-.20, p<.10$), RRQ の「反芻」($r=-.20, p<.05$) には有意傾向または有意な弱い負の相関が見られた。また、ネガティブな概括的記憶の比率と CES-D ($r=.21, p<.05$), RRQ の「反芻」($r=.24, p<.05$) には有意な正の相関が認められた。ニュートラルな概括的記憶の比率と CES-D ($r=-.20, p<.10$), RRQ の「反芻」($r=-.19, p<.10$) には有意傾向の弱い負の相関が見られ、VACS 総得点 ($r=.25, p<.05$), 選択的注意 ($r=.29, p<.01$), 及び EC の「注意の制御」($r=.30, p<.01$) には有意な正の相関が見られた。

考 察

本研究の目的は能動的注意制御機能と自伝的記憶の概括化との関係性を検討することであった。

具体的記憶の比率と VACS の Pearson の積率相関分析の結果、具体的記憶の比率と VACS 総得点、及び3つの下位尺度、EC の下位尺度「注意の制御」とは有意な相関は見られず、仮説1は支持されなかった。

概括的記憶の比率との Pearson の積率相関分析の結果、VACS の3つ下位尺度、及び EC の下位尺度「注意の制御」とは有意な相関は見られなかったものの、概括的記憶の比率と VACS 総得点は有意傾向の弱い正の相関が見られた。これは仮説2とは反対の結果となった。マインドフルネス訓練によって、OGM の改善を示した介入研究 (Heeren et al., 2009) から、マインドフルネス瞑想の手続きと類似した手続きを持つ ATT を行うことで、同様に OGM を改善することができる

Table 1
記述統計量および Pearson の積率相関分析の結果 ($N=93$)

		1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.	11.	12.	13.	14.	15.
1. CES-D		-														
2. RRQ	反芻	.65**	-													
3. VACS	合計	-.30**	-.16	-												
4.	選択的注意	-.25*	-.09	.68**	-											
5.	注意の転換	-.24*	-.14	.85**	.37**	-										
6.	注意の分割	-.22*	-.14	.82**	.24*	.66**	-									
7. EC	注意の制御	-.34**	-.31**	.76**	.49**	.69**	.60**	-								
8.	具体的記憶の比率	.05	.11	-.17	-.15	-.12	-.12	-.17	-							
9.	ポジティブな具体的記憶の比率	-.20†	-.20*	-.08	-.03	-.03	-.12	-.11	.62**	-						
10.	ネガティブな具体的記憶の比率	.15	.21*	-.20†	-.07	-.19†	-.20†	-.17	.79**	.33**	-					
11.	ニュートラルな具体的記憶の比率	.12	.18†	-.05	-.20†	-.03	.10	-.05	.59**	-.02	.20†	-				
12.	概括的記憶の比率	.01	.03	.17†	.18	.16	.13	.17	-.84**	-.52**	-.67**	-.50**	-			
13.	ポジティブな概括的記憶の比率	.03	.00	.07	-.00	.06	.11	.10	-.44**	-.33**	-.32**	-.23*	.50**	-		
14.	ネガティブな概括的記憶の比率	.21*	.24*	-.02	-.11	.07	.01	-.09	-.57**	-.32**	-.51**	-.30**	.71**	.26*	-	
15.	ニュートラルな概括的記憶の比率	-.20†	-.19†	.25*	.29**	.16	.13	.30**	-.53**	-.31**	-.38**	-.37**	.61**	-.09	.03	-

** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$.

ろうと仮定していたが、この結果からは能動的注意制御を向上させることで、OGM が深刻化するということになる。しかし、OGM の改善を示したマインドfulness・トレーニングによって注意制御機能が向上することも明らかになっているため (Goldin & Gross, 2010)、その可能性は低く、本研究では明らかになっていない交絡要因の存在が想定される。

加えて、エピソードの感情価別に具体的、概括的記憶の比率を検討すると、ポジティブな具体的記憶の比率と CES-D は有意傾向の弱い負の相関を示し、仮説 3 は支持された。また、ネガティブな概括的記憶の比率と CES-D は有意な正の相関が認められ、仮説 4 も支持された。本研究において、結果に影響すると想定していなかったニュートラルな概括的記憶の比率が、CES-D と有意傾向の弱い負の相関が見られ、また適応的とされる VACS 総得点および選択的注意と有意な正の相関が見られた。ニュートラルな概括的記憶の比率と VACS 総得点に正の相関が見られたことが概括的記憶の総数と VACS 総得点との関連に影響し、弱い正の相関を示したとも考えられる。ニュートラルな概括的記憶の比率は CES-D のみならず、RRQ の「反芻」とも有意傾向の弱い負の相関が示されたことや EC の「注意の制御」においても有意な正の相関が示された。注意機能を測定する点で、VACS と類似する尺度である EC の「注意の制御」と OGM との関連を検討したが、EC の「注意の制御」で測定しているのは、集中力や注意の切り替えなどの実行注意であり、EC の「注意の制御」においても VACS と同様の結果が得られたことは大変興味深い。OGM は必ずしも不適応なものではなく、適応的な側面もある可能性があり (Matsumoto, Takahashi, & Kawaguchi, 2020)、本研究の結果から、ニュートラルな概括的記憶は適応的な機能を持っている可能性が示唆された。したがって、感情価によって OGM の機能が異なる可能性があるため、本研究の結果からもエピソードの感情価ごとに OGM を検討する必要があると示唆された。

しかし、本研究では、数々の先行研究で見られていた抑うつと OGM の関連が再現されなかった。具体的記憶の比率及び概括的記憶の比率と CES-D の相関が示されていないことから、AMT の実施方法に問題があったか、オンライン調査の回答傾向に問題があった可能性が考えられる。AMT は対面で行われるのが一般的であり、臨床群を対象にした研究では記憶の想起に 60 秒、非臨床群を対象にした研究は 30 秒の制限時間を設けていることが多い。一方、記述式で OGM を測定しようとした研究 (Takano et al., 2017; Reas et al., 2007) は、制限時間を設けていないことが多い。本研究では 90 秒の制限時間を設けたが、制限時間内に適切な記憶を想起しその内容を記述するのは困難であった可能性があり、タイピング速度などの個人差要因が結果に影響

していた可能性がある。また、オンライン調査で実施することの問題点として Satisfice (努力の最小限化) が挙げられる (三浦・小林, 2018)。AMT-OI を実施する上で協力者に課した自由記述は、選択肢によるアンケートよりも多くの認知的資源を必要とするため、Satisfice が起こりやすかったと考えられる。本研究での AMT の方法が影響し、OGM を検出できなかった可能性がある。

本研究では、AMT で得られた回答を実験者と評定者の 2 名で分類したが、分類の一致率が低かったことも問題として挙げられる。日本語の文章において、単数形と複数形の名詞の区別が明確にされていないことやしばしば主語が省略されることなどの日本語特有の問題によって (Takano et al., 2017)、エピソードの具体性の分類を難しくした可能性がある。

本研究では能動的注意制御機能と OGM の関連をオンライン調査によって検討した。能動的注意制御尺度得点が OGM と負の関連を示すという仮説は支持されなかった。本研究において、オンラインで行った AMT に制限時間を設けたことが結果に影響したと考えられる。今後は、AMT の実施方法に関して、対面での実施や記憶想起の時間を問わない方法でのオンライン調査など、OGM 研究において一般的な方法を用いて、能動的注意制御機能との関係性を再検討することが必要である。加えて、本研究では能動的注意制御機能を尺度で測定したが、注意制御機能を能動的な側面から測定する実験課題として用いられている両耳分離聴課題 (今井, 2014) を使用することで、より正確な注意制御機能との関連性が見られる可能性がある。したがって、両耳分離聴課題から得られる結果から OGM を再検討することが必要である。

引用文献

- Brittlebank, A. D., Scott, J., Williams, J. M. G., & Ferrier, I. N. (1993). Autobiographical memory in depression: State or trait marker. *British Journal of Psychiatry*, 162, 118–121.
- Debeer, E., Hermans, D., & Raes, F. (2009). Associations between components of rumination and autobiographical memory specificity as measured by a minimal instructions autobiographical memory test. *Memory*, 17, 892–903.
- de Decker, A., Hermans, D., Raes, F., & Eelen, P. (2003). Autobiographical memory specificity and trauma in impatient adolescents. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, 32, 22–31.
- Goddard, L., Dritschel, B., & Burton, A. (1996). Role of autobiographical memory in social problem solving and depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 105, 609–616.
- Goldin, P. R., & Gross, J. J. (2010). Effects of mindfulness-based stress reduction (MBSR) on emotion regulation

- in social anxiety disorder. *Emotion*, 10 (1), 83–91.
- Heeren, A., Van Broeck, N., & Philippot, P. (2009). The effects of mindfulness on executive processes and autobiographical memory specificity. *Behaviour Research and Therapy*, 47, 403–409.
- Hitchcock, C., Golden, AMJ., Werner-Seidler, A., Kuyken, W., & Dalgleish, T. (2018). The Impact of Affective Context on Autobiographical Recollection in Depression. *Clinical Psychological Science*, 6 (3), 315–324.
- Hsu, K. J., Beard, C., Rifkin, L., Dillon, D. G., Pizzagalli, D. A., & Björkqvist, T. (2015). Transdiagnostic mechanisms in depression and anxiety: The role of rumination and attentional control. *Journal of Affective Disorders*, 188, 22–27.
- 今井 正司 (2014). ニューロサイエンスと認知行動療法の統合：注意障害と認知行動療法. 認知療法研究, 7, 146–149.
- 今井 正司・熊野 宏昭・今井 千鶴子・根建 金男 (2015). 能動的注意制御における主観的側面と抑うつ及び不安との関連. 認知療法研究, 8, 85–95.
- Krosnick, J. A. (1991). Response strategies for coping with the cognitive demands of attitude measures in surveys. *Applied Cognitive Psychology*, 5, 213–236.
- 松本 昇・望月 聡 (2012). 抑うつと自伝的記憶の概括化——レビューと今後の展望——心理学評論, 55, 459–483.
- 松本 昇・望月 聡 (2013). 抑うつによる自伝的記憶の具体性の減少——アナログ研究のための教示法の検討——感情心理学研究, 21 (1), 11–18.
- Matsumoto, N., & Mochizuki, S. (2017). Effects of self-relevant cues and cue valence on autobiographical memory specificity in dysphoria. *Cognition and Emotion*, 31 (3), 607–615.
- Matsumoto, N., Takahashi, Y., & Kawaguchi, J. (2020). Increased Direct Retrieval of Overgeneral Categorical Memory in Individuals with Dysphoria and a History of Major Depression. *Cognitive Therapy and Research*, 44, 483–498.
- 三浦 麻子・小林 哲郎 (2018). オンライン調査における努力の最小限化が回答行動に及ぼす影響. 行動計量学, 45 (1), 1–11.
- 西 優子・今井 正司・金山 裕介・熊野 宏昭 (2013). 中学生におけるディタッチト・マインドフルネスの機能が抑うつの持続要因となる反芻に及ぼす影響. 早稲田大学臨床心理学研究, 12, 55–62.
- Raes, F., Hermans, D., Williams, J. M. G., Beyers, W., Brunfaut, E., & Eelen, P. (2006). Reduced autobiographical memory specificity and rumination in predicting the course of depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 115, 699–704.
- Raes, F., Hermans, D., Williams, J. M. G., & Eelen, P. (2007). A sentence completion procedure as an alternative to the Autobiographical Memory Test for assessing overgeneral memory in non-clinical populations. *Memory*, 15, 495–507.
- Rueda, M. R., Posner, M. I., & Rothbart, M. K. 2004 Attentional control and self-regulation. In R. F. Baumeister, & K. D. Vohs (Eds.), *Handbook of self-regulation*. New York: Guilford Press. Pp. 283–300.
- 関口 理久子・竹中 健二 (2005). 再生された自伝的記憶の内容に抑うつ気分が与える影響：非臨床群における検討. 関西大学社会学部紀要, 36, 61–78.
- 島 悟・鹿野 達男・北村 俊則・浅井 昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について. 精神医学, 27 (6), 717–723.
- 田中 圭介・杉浦 義典・神村 栄一 (2010). 心配に対する注意訓練とマインドフルネスの比較. 広島大学大学院総合科学研究科紀要 (人間科学研究), 5, 47–55.
- 田中 圭介・杉浦 義典・竹林 由武 (2013). 注意の定位機能とマインドフルネス傾向の関連——注意の喚起機能による調整効果——パーソナリティ研究, 22 (2), 146–155.
- 高野 慶輔・丹野 義彦 (2008). Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版作成の試み. パーソナリティ研究, 16, 259–261.
- Takano, K., Mori, M., Nishiguchi, Y., Moriya, J., & Raes, F. (2017). Psychometric properties of the written version of the Autobiographical Memory Test in a Japanese community sample. *Psychiatry Research*, 248, 56–63.
- Takano, K., Moriya, J., & Raes, F. (2017) Lost in distractors: Reduced Autobiographical Memory Specificity and dispersed activation spreading over distractors in working memory. *Behaviour Research and Therapy*, 94, 19–35.
- Wells, A. (1990). Panic disorder in association with relaxation induced anxiety: An attentional training approach to treatment. *Behavior Therapy*, 21, 273–280.
- Wells, A. (2005). Detached Mindfulness In Cognitive Therapy: A Metacognitive Analysis And Ten Techniques. *Journal of Rational-Emotive and Cognitive-Behavior Therapy*, 23, 337–355.
- Williams, J. M. G., & Broadbent, K. (1986). Autobiographical memory in attempted suicide patients. *Journal of Abnormal Psychology*, 95, 144–149.
- Williams, J. M. G. (2006). Capture and rumination, functional avoidance, and executive control (CaRFAX): Three processes that underlie overgeneral memory. *Cognition and Emotion*, 20, 548–568.
- Williams, J. M. G., Ellis, N. C., Tyers, C., Healy, H., Rose, G., & MacLeod, A. K. (1996). The specificity of autobiographical memory and imageability of the future. *Memory and Cognition*, 24, 116–125.
- 山形 伸二・高橋 雄介・繁樹 算男・大野 裕・木島 伸彦 (2005). 成人用エフォートフル・コントロール尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討. パーソナリティ研究, 14, 30–41.